

ダニエル・ヤーギン著「新しい世界の資源地図―エネルギー・気候変動・国家の衝突―」東洋経済新報社 2022年2月10日刊を読む

### 新しい世界の資源地図―エネルギー・気候変動・国家の衝突―

1. (1)本書で論じるのは、地政学とエネルギー分野の劇的な変化によってどのような新しい世界地図が作られようとしているか、またその地図にどのような世界の行方が示されているかだ。  
(2)地政学の面で広範囲に生じている変化を掘り下げる。  
(3)変化の背景には、
  - ①エネルギー分野において米国の地位が大きく変わったことと、
  - ②再生可能エネルギーや、
  - ③気候をめぐる新しい政治の役割が、著しく重みを増してきたことがある。
  
2. (1)ここには異なる種類の力が絡んでいる。  
(2)1つは国家の力だ。
  - ①これは経済力、
  - ②軍事力、
  - ③地理的条件のほかに、
  - ④大規模な戦略と計算ずくの野心、
  - ⑤疑心と怖れ、
  - ⑥偶発的な出来事と不測の事態によって決まる。  
(3)もう1つは、
  - ①石油と天然ガスと石炭、
  - ②風力と太陽光、
  - ③それに核分裂から生まれる力だ。  
(4)さらに、世界のエネルギーシステムを作り直し、気候変動対策の名のもとに炭素の排出量実質ゼロを目指そうとする政策の力も働いている。
  
3. (1)単純な地図ではない。  
(2)絶えずダイナミックに変化し続けている地図だ。  
(3)加えて、2020年に新型コロナウイルスという厄介なウイルスが中国から世界中に広まったことで、いっそう状況は複雑になっている。  
(4)新型コロナウイルスは、
  - ①甚大な人的被害と騒動を招いただけでなく、
  - ②世界経済を停止させ、
  - ③商業をローカルでもグローバルでも滞らせ、

- ④仕事を奪い、
- ⑤企業を潰し、
- ⑥多くの人を困窮させ、
- ⑦世界経済を大恐慌以来の不況に陥らせ、
- ⑧国債を大量に増発させ、
- ⑨国家間の緊張を高め、
- ⑩世界のエネルギー市場に深刻な混乱をもたらした。

4. 本書では、この新しい地図を読み解いていきたい。

- (1) 世界における米国の地位はシェール改革でどう変わったか。
- (2) 米国 VS ロシア・中国の新冷戦はどのように、どういう原因で発生しようとしているか。
- (3) 新冷戦にエネルギーはどのような役割を果たすか。
- (4) 米中の全般的な関係は今後、どれくらい急速に(どれくらいの危険をはらんで)「関与」から「戦略的戦争」へ推移し、冷戦の勃発と言える様相を帯び始めるか。
- (5) いまだに世界の石油の3分の1と、かなりの割合の天然ガスを供給している中東の土台はどれくらい不安定になっているか。
- (6) 1世紀以上にわたって続き、すっかり当たり前になっている石油と自動車の生態系が今、新たな移動革命によってどのような脅威にさらされているか。
- (7) 気候変動への懸念によってエネルギー地図がどのように描き直されているか、
- (8) また、長年議論されてきた化石燃料から再生可能エネルギーへの「エネルギー転換」が実際にどのように成し遂げられるか。
- (9) そして、新型コロナウイルスによってエネルギー市場や、世界の石油を現在支配しているビッグスリー(米国、サウジアラビア、ロシア)の役割はどう変わるか。

5. (1) 第2部「ロシアの地図」では、エネルギーフローの相互作用や地政学的なせめぎ合い、さらには30年前のソビエト連邦崩壊と、ロシアを再び大国にしたいというウラジーミル・プーチンの宿願のせいで、なかなか決着しない国境問題から生じる火種について論じる。

- (2) ロシアは「エネルギー大国」だが、経済面で石油と天然ガスの輸出に大きく依存している。
- (3) ソ連(ソビエト社会主義共和国連邦)時代同様、現在も、それらの輸出がもたらしうる欧州への政治的な影響力については、激しい論争が巻き起こっている。
- (4) ただし、欧州や世界の天然ガス市場で起こった変化によって、そのような潜在的な影響力は消し去られている。

6. (1) ソ連が突然、15の独立国に分かれたことで生じた不安定な状況は、いまだに解消されていない。

- (2) とりわけ先行きが不透明なのは、天然ガスをめぐって対立するロシアとウクライナの関係だ。
- (3) 2014年のロシアによるクリミア併合後、両国の争いの舞台はウクライナ南東部の戦場に

移った。

(4) 奇妙な歴史のめぐり合わせで、この紛争——具体的には、ロシアの戦車に対抗するために米国からウクライナに供与された武器の問題——をきっかけに、ドナルド・トランプは米下院に弾劾訴追された(その後、上院の弾劾裁判で無罪判決を受けた)。

7. (1) 米ロ関係は、1980年代初頭のソ連時代以来見られなかったほどにまで冷え込んだ。

(2) 同時に、ロシアは中東に「回帰」するとともに、中国に近づく「東方シフト」を進めている。

(3) 結束した中ロ政府は「完全な主権」を主張し、米国の「覇権」に異を唱える。

(4) 中ロのこの急接近には、実際的な思惑もある。中国はエネルギーを必要とし、ロシアは市場を必要としているからだ。

P1 ~ 4

#### <コメント>

エネルギーとその影響に関する研究、つまり、「地政学」研究の第一人者ダニエル・ヤーギン氏の最新著。現代世界を読み解く第一級のテキスト。是非、名著「市場対国家—世界を作り変える歴史的攻防—」日経文庫とともにご一読を！

#### <1つの懸念>

なぜロシアはここまで追いつめられ、あのような暴挙に出たのか。その一因は、米国の前大統領がロシアを刺激し過ぎたことにあるかもしれない。ここで更に経済制裁で最後まで追いつめれば、手負いの狼はどうか。第2次世界大戦直前の日本と同じ可能性が極めて高い。核兵器を用いた世界大戦への道をたどるかも。ではどうしたらよいのか。

2022年3月2日 林明夫記